大江健三郎

Kenzaburo Ohe

われらの文学

18

大江健三郎

aburo Ohe

らの文学　18

編集＝大江健三郎／江藤淳

講談社

われらの文学　18　大江健三郎

定価＝四三〇円
昭和四〇年一一月十六日発行
著者＝大江健三郎
発行者＝野間省一
発行所＝株式会社講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九
電話　東京（九四二）一一一一（大代表）　振替東京三九三〇
印刷所＝大日本印刷株式会社
製本所＝加藤製本株式会社

©講談社　昭和四〇年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

目次

性的人間 5
叫び声 74
セヴンティーン 188
戦いの今日 227
人間の羊 269
飼育 284

320 死者の奢り
347 奇妙な仕事
358 芽むしり仔撃ち
467 私の文学＝大江健三郎
477 解説＝江藤淳
491 略年譜

装幀＝細谷巌　巻頭写真撮影＝野上透

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

大江　健三郎

性的人間

1

暗闇のなかを象牙色の大きなジャガーが岬の稜の突端まで疾走してくる。ジャガーは夜の海にむかって右に、滝のように不意に急勾配の降り坂となった枝道へはいりこみ、岬の南側に脇の下のようにかくれている耳梨湾にむかった。ジャガーはアリフレクス16ミリを積んでいる。車も、撮影機も、みんなからJと呼ばれている二十九歳の青年のものだ。J、その妻、ジャガーを運転しているJの妹、中年男のカメラマン、若い詩人、二十歳の俳優と十八歳のジャズ・シンガー、その七人がジャガーに乗ってJの別荘にむかうところだ。Jの妻がつくっている短篇映画のいくつかのシーンをとるために。

ジャズ・シンガーの娘はすっかり裸だ。彼女は酔って歌っている。それからみんなが彼女の歌を注意深くきかないので自分がそのジャガーの中の誰からも軽蔑されているという強迫観念にとらえられていつか好評をはくしたことのある露骨な話をもういちどためしてみようとする。東京から四時間、車を走らせているあいだ、運転しているJの妹をのぞいてほかの者はみな始終、ウィスキーを飲んでいたのだが、その十八歳の歌手が、まず最初に、仲間たちの酔いの戦列から、ひとり早駈けしたのだった。それは、いつものことだった。彼女には自制心が欠けていた。

「わたしが政治家のパーティに仕事に行った時のことなのよ。わたしと一緒の控え室に化粧もしていない十六歳の子が、ピンポンの球と青いビニールの衣裳を膝において坐っていたのね。そこでわたしたちは友達になったわけよ。仕事の順番がきてもその子はお化粧しなかったのよ。裸になるだけ。そして青いビニールの寝袋みたいな服に頭からはいこんで、わたしに背なかの下半分だけについているジッパーをあげさせたわ。その青い服は、蛙の衣裳なのよ。体じゅうすっぽりくるんで、股だけ魚の口みたいな穴がひらいているのよ。政治家たちは、女の子の性器をした青い蛙を見るわけ、しかもピンポンの球を体にいれていて、それが踊りにあわせてブル、ブル、蛙みたいに鳴くわけよ！」

残りの六人が憂鬱に声をあげて笑った。それはもしここで笑わなければ歌手が泣いて暴れはじめるのをみな知っていたからだ、みんなの笑い声に上機嫌になって歌手

は、

「その子の蛙ダンスの技術はすばらしいものなのよ。ほんとうにすばらしい技術なのよ」といって誇らしげに聴き手たちを見まわしサスペンスをかもしだそうとした。

「パーティの政治家たちは、技術を見たんじゃない。十六の娘がどんなに恥しらずになれるか、ということを見たのさ」と運転している妹の脇に妻とならんで坐っているJがいった。「どんな種類の、わいせつなショウでも、それはかわらないよ。技術を見せて、そのかわり恥ずかしい自分の肉体は透明にする、ということはできないさ。観客が見たいのは、恥しらずな肉体そのもの、恥そのものなんだから！」

十八歳のジャズ・シンガーは失望し、不機嫌になり、すすり泣きはじめた。Jと歌手とが性関係をもっていることはJの妻もふくめて、誰もが知っていた。そこでますます憂わしげに十八歳の娘は裸の肩をふるわせて泣いた。もしそれが車のなかでなければ、彼女はナイフか砕けた瓶をもって、恐怖にかられた猫のように暴れただろう。

「なぜ、意地悪するのよ、それに、暗くて道もまがりくねっているんだし、すこし静かにしてくれたらどうなの？　小屋につくまえに死にたいの？　あなたたちの映画を完成することもなく」と運転しながら妹はJをなじった。彼女は自分の兄が奇妙に心理関係のいりくんだ意地悪をすることに耐えられないのだった。

そこでJの妹と泣く娘のほかは、みんなわずかに微笑して黙りこみ、酒を飲み、車のエンジンの音と自分の内部の音を聞いた。なぜ微笑しているのかは誰も考えてみなかった。かれらはいつも黙りこむときには余裕ありげに微笑した。ジャガーは坂をくだりきって湾の右の翼に入りこみ、左の翼にむかって耳梨村の狭い石畳の道を徐行した。

「窓をしめてくれない？　死んだ魚や網の臭いが厭なのよ。みんなは平気なの？」とJの妹がいった。

残りの者たちの誰か二人が窓をとざした。

「こんなに注意して走っても、明日の朝みれば、いくつかの引っかき傷はあるのよ」とJの妹は兄にむかって嘆くようにいった。「なぜ、あなたが運転してくれないの？　あなたは運転の天才なのに」

「酔っていて危いよ、海におちるよ」とJは微笑したまま唇もうごかさずにこたえた。

石畳の道を走る車は、海水のみなぎっている短い掘割をたびたびわたった。道は湾のすぐ内側をゆるやかに彎曲して聚落の端と端とをむすんでいる。道の両脇の家屋群は死んだ象の列のようだ。濃い灰色でそれ自体の内部にむかってすっぽり閉ざされた印象の家屋群。燈は掘割

の向うの海の方角からわずかな光をなげかけてくる。碇泊している漁船の標識の燈だ。家屋群は、影のなかにある。

ジャガーは凪いだ海の音よりもなおひそやかな音をたてて徐行していた。そして不意に、石道の前方に、人々の群をヘッド・ライトがとらえた。運転している娘がブレーキを踏む。シートから酒瓶が転げおちて音をたてる。十八歳の歌手は泣きやめて罵ろうとするが、結局黙ってしまう。ジャガーのなかのすべてのものが好奇心にかられてヘッド・ライトに照らしだされている人々を眺めた。

突然の強い光のなかで盲の地鼠のようにたじろいでいる三十人ほどの漁民たち。おもに女たちだ。数人の老人たちと子供たちがそれにまじっている。女たちはみなアイヌ人のように濃く暗い色の厚司を着こんでいて、誰もおなじ年齢、中年のように見える。みな昂揚し苛だち不機嫌な中年女たちの集団。ヘッド・ライトはすべての者の顔をみにくく動物的に、卑小に見せる。人々は敷石道をいっぱいにうずめて一軒の家の前にたたずんでいる。いまはすべての顔がジャガーに向けてふりかえられているが一瞬前まではすべての眼がその家を見つめていたことが確かに感じられる。

「ケイコを隠して。座席の前に屈みこませて上着を頭からかけてやって！」とJの妹がいった。

サワ・ケイコというのがジャズ・シンガーの名前だ。ケイコは素直にしたがった。前のシートの背に脇腹と腰とをおしつけてひざまずいた娘の裸の小さな体が上着やらスカートやらでおおわれる。車がふたたび動きだしたとき倒れないように、後部座席の残りの三人がその膝でサワ・ケイコを支えている。ジャガーは徐行して人々にむかう。Jがためらいがちに腕をクラクションへのばしたとき、Jの妹は怯えたような声で、しかしきびしく兄を制して、

「だめよ、そんなことしたら、車をひっくりかえされて焼かれるわ。あの人たちは、いま自分のほうから動こうとしているのよ！」といった。

ジャガーが接近すると確かに人々は静かにスムーズに敷石道の両側の家々の軒先にしりぞいた。そのときかれらはもう、車とそのなかの七人にたいして好奇心をいだいていないようだった。むしろまったく無関心にさえ見えた。車のなかの者もそれにならおうとしたがうずくまっている裸の娘は震えていた。車が人々のあいだをとおりぬけるときはじめて、皆が見まもっていたその聚落の海がわのその家だけ、開かれた二階の窓のむこうに燈がともっており、それが敷石道やら人々の顔やらをあかるませているのがわかった。

そこを通りぬけるとジャガーは速度を早めた。はじめみんな鬱屈したように黙っていた、かれらはみなおびやかされたような気分だった。そしてこういうときつねに、沈黙や緊張を解消させる役割の中年男のカメラ技師が豪傑笑いをして、こういった。いったん笑うとなるとかれは豪傑笑いしかできないのだ。

「こちらから刺戟さえしなければなにもしない原住民の部落をとおりすぎる探検隊みたいだったじゃないか？ おれはボルネオへ教育映画をとりに行ったときのことを思いだしたぜ！ また、西部劇のことも思いだしたなあ」

サワ・ケイコは裸の体をおこし、カメラマンの肥った短い膝の上に尻をおちつけた。そしていくらか酔いのさめた沈んだ声で、あの連中、インディアン？ などと甘ったれたことをいっていた。

「あの人たちは、この村の住民よ。男たちは漁に出ているから、きっとこの村に残っている全員があそこに集っていたんじゃない？ わたしはこの湾の人たちのいろんな頭を粘土でつくったわよ」とJの妹がいった。彼女は二十七歳で彫刻家だ、この夏のはじめパリからかえってきた。彼女はJ夫婦のつくる映画の美術を担当するだろう。

「車をとめて明日の魚をたのんでおけばよかったじゃないか？」とJが非難した。

「あなたは、この湾の村のことをなにもしらないのよ。わたしたちが疎開してきていたとき、あなたは家のなかで絵をかいてばかりいて、この湾までおりてくることを恐がっていたから！ 漁師の子を怖れて！」

ジャガーは敷石道を聚落のはずれまで来て、低い防波堤の向うに胆汁のように黒っぽく翳った海を見おろしながら迂回した。ジャガーは再び坂をのぼりはじめる。潮風に負けた灌木の枝が、暴力的にねじまげられた腕のような苦しげな形でジャガーのフロントグラスにむかってさしのべられる。それらに叩かれてジャガーは音をたて、車のなかの七人は一瞬、驟雨のなかに閉ざされたような気分になった。

「漁師の子供は恐くなかったよ。ただ、うちの家族が、山の上に地所と小屋とをもっているだけで、湾の連中に怖れられているのが厭だったから、おりて行かなかったんだよ。きみよりおれのほうが鈍感でなかったのさ」とJ。

「昂奮してびっくりして憤激している顔だったわね、たとえば性交しているところを他人に見つけられたみたいな！」とサワ・ケイコがいった。

そこで運転している娘のほかの六人は笑った。

「ケイコなら、性交しているところを他人に見つけられ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb

ても平気だろう？　しかし、ケイコの観察力は時どき正確だよ」とカメラマンがいった。
「あの人たちは、姦通した女を辱しめにきていたのよ」とJの妹が、兄にだけささやきかけるように低い憂鬱な声でいった。「わたしたちが疎開してきていたときにもこういうことがあったわ。あの家に姦通した女がかくれているのよ。家の出入口は板でうちつけられているんだと思うわ。今夜はあの人たちのかげになって見えなかったけど」
「真夜中に集ってきてどうするんだ？　辱しめるといっても、なあ？」
「ただ、じっと家のまえに立っているだけよ、村じゅうの女たちや老人や子供が、それに男たちがいるときは、男たちまで！　それで充分に辱しめることじゃない？　胸が悪くなる、思ってみるだけで」
「そうだよ、おれも胸が悪くなる、厭だよ、姦通くらいで！」と後部座席の二十歳の俳優がいった。
「ぼうやも毎晩、自分のアパートのまえに東京中の人間におしかけられては、胸が悪くなるさ！」とカメラマンがいった。
「ほんとに、ぼうやには百人もの夫が姦通されているんだからねえ」と裸のジャズ・シンガーが俳優を年下あつかいしていった。

ジャガーは九十九折れの坂道をのぼり、湾をかこむ聚落を不意に真下に見おろす高台に出ていた。
「ああ、車をとめてよ、連中が囲んでいた家の二階の窓に燈がついていたね。なにか見えるんじゃない？」とカメラマンがいった。
七人はジャガーの外に出た。サワ・ケイコはシートに敷いてあった毛布をメキシコのポンチョのように肩にはおっていた。カメラマンが撮影用のレンズをたちまち組みあわせて望遠鏡をつくった。かれは教育映画や宣伝用のフィルムをつくる会社につとめているが、古風な蛮からタイプで同僚と協調しない、企業内のアウトサイダーだ。会社で認められず出世できないことがはっきりすると、かれは口髭を生やしグレイの背広のかわりに汚れたセーターを着こみオールド・ファッションの車に乗り、こまごました発明に熱中した。たとえば望遠鏡レンズを組みあわせたりすることだ。またかれは若い友人たちが映画をつくるということをきくと家族も会社の仕事も二の次にしてそれに熱情をかたむけ、この不確かな仕事に献身した。かれは大いなる欲求不満の四十男だった。鋭い才能があるというのではなかったが、じつに善い人間で、酒飲みだったが怠惰ではなかった。会社の仕事に今はもう興味をひかれていないにしてもそれをなおざりにはしなかった。明日も、夜明け方の一時間の撮影がおわ

れば、かれは独りだけでも車を運転して、東京の会社へ出勤するだろう。

望遠鏡の調整がおわると七人はかわるがわる真下の聚落のただひとつだけ明るい窓をのぞきはじめた。女が屈みこんでせわしげに腕をうごかしているのが見えるが、その女がなにをしているかは不明瞭だ。七人は永いあいだ見つめつづけた。女の体の運動はあいかわらずだ。七人の位置からは女の背と乱れた豊かな髪の揺れるのだけが見え、腕の動作は不明瞭なのだ。肩の激しい上下運動は深く印象的だが。かれらはじつに永いあいだ眺めていた。それからみんなむしろ自分のみたされない好奇心に疲れてしまった。

「もう車にかえろうよ、寒いよ」とサワ・ケイコが時宜をえていった。この十八歳の色情狂の娘にはこの種の気転がある、それは愚かしい甲虫の触覚だけの鋭敏さみたいだ。

そこでみんな、女の運動の意味をさぐりあてることをあきらめてジャガーに戻った。Jとその妻と妹の三人が前の座席に、カメラマン、ジャズ・シンガー、俳優、それにずっと黙って、ウィスキーを飲んでいた若い詩人が後部座席に坐って、ジャガーは発車した。そのずっと黙っていた若い詩人は二十五歳で、一冊の詩集を自費出版したばかりだ。かれはJ夫婦の友達ということで、この映画にコメントをつける仕事をひきうけたのだ。かれはJの若い妻と大学の同級生だった。そして大学の最後の学年ではきわめて親しかった。一緒に寝たこともある、しかも一度だけでなく。そのころのJの妻は貧しいながら昂然としたライオンの牝みたいな娘で、映画監督をこころざしていた。この映画狂の同級生とかれは卒業とともに別れたが一年たってかれのところへ、その娘から結婚式への招待状がとどいた。同級生の夫Jは、鉄鋼会社の社長の息子で、かれら二人より四歳年上だった。Jは、芸術的なパトロン趣味で、アリフレクス16ミリの撮影機をもち、芸術家の妹をもち、スポークのついた白タイヤの象牙色のジャガーをもち、湾をみおろす別荘をもち、世界一周のパン・アメリカンの切符までもっていた。かれは妻が映画をひとつ作る資金さえ父親のポケットからくすねてきた。同級生はJに夢中で、また映画をつくる計画に夢中だった。若い詩人は友人に頼んでその夫のJから費用をかり、詩集を出版し、そのかわりに映画のコメントを書くことをひきうけた。かれは新夫婦の家庭の友人ということになっていたがJにたいしてはいつまでもひとつの確実な疎遠の感覚を克服することができないのだった。かれはかつて一緒に寝たことのある同級生の夫にたいして嫉妬を感じていたのか？　同級生はその夫がゴージャスなアパートで若い俳優や歌手たちを

あつめてひらくパーティにかれを招待した。それが彼女だけの意志なのか、Jもそれを望んでいるのかそれがかれにはわからず不安を残していた。
「なあ、あれをどう思う？」とJが、若い詩人とおなじように、ずっと黙りこんでいるその妻にいった。妻は瓶からじかにウィスキーを飲んでいるところだった。
「米を研いでいたのよ」と妻は考えもせずにいった。
　そうだ、あの姦通して追いつめられている女は、米を研ぎながら忍耐し、抵抗していたのだ、とみんなが感じる。それから七人はみな、おびやかされながら米を研ぐ女と、その家のまえにたたずんでじっとしている恐れる人々をめぐり考えこんで黙った。やがて、
「なぜ窓をひらいていたんだろう？」と二十歳の俳優がいった。はじめ誰もこたえなかったので、かれは気分を害して顔をあからめたが、それに気づいて詩人がこういった、
「暑かったんじゃないか？　いまはもう真夜中で涼しいけれども、部屋のなかで体をうごかすのがまだ暑い時分から、きっと夕暮から、あの女は米を研ぎつづけていたんだろう」
「ああ、今日はこの夏でもいちばん暑い日だったからなあ。しかしなぜあの女は夜ふけになって涼しくなっても窓をしめないんだろう？」
「外の連中を挑発するみたいで恐いんだろうさ」
「胸が悪くなる！」と俳優はいった。
　それからみんな黙りこんだ。身震いするものもあった。ジャガーは湾の南側の丘陵のいただきをめざしてロー・ギヤーで登っていた。

　山荘につくと七人はジャガーから撮影用具、ウィスキーやジンの瓶、食物、ポータブル録音器とテープそれに数冊の本とノートなどをおろした。肌寒かったのでジャズ・シンガーは車のなかで頸と背をきゅうくつにおりまげ下着をつけたが、服を着ることはむつかしくて、結局、サテンのワンピースの格子模様の毛布ともども脇にかかえておりてきた。彼女もふくめてみな、もう酔いがさめかかっていた。そしてみな酒をほしがっていた。
　山荘は湾に面した斜面を切り崩してつくった狭い平地の上に丸太の柱と鋼鉄の針金で支えられて吊り籠のように張りだしていた。ジャガーは山荘の真下に駐車していた。崖にかけられた急な梯子をのぼって山荘にあがって行くのだが、かれら七人が梯子をのぼりきると、すでに象牙色のジャガーは濃い闇にまぎれこんだ。暗い空、黒い雲、雲とおなじほど黒い海と聚落が眼下にひろがった。
　山荘にはいって燈をともすと、七人はおびやかされる

感情からいくぶん解放された。海と反対側に、山荘は広い庭園をひかえている。それは山荘の一階の床からわずかに低い露台に接しており、しだいにたかまってひろがる。したがって山荘の二階の窓から見おろすものの眼にも庭園がとくに低く感じられることはない。広間にともされた燈が、露台のはしの生い茂った夏草と芝とを、あざやかなみどり色に浮びあがらせる。暗闇のなかの庭園は石版の地の青にかさねて刷った黒を思わせる色をしている。七人は広間の床に荷物をおろし、広い硝子戸どしに庭園の暗闇を眺めた。

「一階はこの広間だけです、浴室とトイレット、それにキッチンがこの奥についているけれど。二階に三つの寝室と、物置とがあります。ホテルの部屋みたいに独立しているから、ひとりになりたい人はそちらへ行ってください。でも、寒いわよ」と二十七歳の彫刻家が、その兄夫婦はべつにして、はじめてこの山荘にきた四人の客たちに説明した。

「ほんとに寒いよ、八月だというのに！　きっと東北のお百姓はおびえてるよ。おれは冷害の取材にずっと泊りこんでいたことがあるんだが、連中は弱い犬みたいにすぐおびえるんだよ、おれ風邪ひくよ、J！」とカメラマンが酒焼けした頬を葡萄色にして身震いしながらいった。

そもそもその青年のことをJと呼びはじめたのは、かれの妹の外国人教師だった。青年の父親がかれにつけた名前はいかにも堂どうとして長たらしく、外国人のためには記憶の困難な名前だったからだろう。それから誰もかれもがかれのことをJと呼びはじめた。Jという頭文字の架空の人物めいた不確かな印象が、その青年にふさわしかったのだ。

「あなたは寒がりねえ。あなたが鯨とりの船に乗って南極まで写真とりに行ったというの、本当かしら、よく凍死してしまわなかったわねえ」

「本当です、それに寒がりと凍死とは関係ないよ、ケイコ。きみも寒さに強いと過信していつも裸でいたら、寒いと気がつくまえに凍死するよ、もっとも南極ではカメラがたびたび故障して、おれは修理屋みたいだったけどなあ」

Jの妹と妻の二人がキッチンからもちだしてきた細く短い薪や新聞紙を煖炉におしこんで火をつけようとしはじめた、カメラマンはすぐにその仕事をひきうけた。

「おれは火をたきつける技術を持っているんだよ、マッチなしで放火もできるよ」といかにも空しくひびく自慢をしながら。

残りの者が（怠惰なJのほかは）煖炉のまわりに広間じゅうの椅子をはこび、円型にならべた。ついでにソ

ファやテーブルを煖炉と反対側のすみにおしつけた、踊りたくなったときのために。また、とくに壁にむけたソファでは眠ることだってできるだろう、友人たちからわずらわされないで。

煙と匂いとが広間にたちこめた。火のそばから体をおこした中年のカメラマンの頬は、もう葡萄色ではなかった。酒焼けの色が戻っている。かれは煙にやられて頬と唇のはしに涙を一滴ずつたらしていたが、火がうまく燃えあがったので眼を輝かせて満足していた。

「ねえ、蜜子ちゃん、地獄に導入するためのカット、この煖炉にどんどん火をたいて撮ろうよ」とカメラマンはJの妻にいった。

「いいわね、火の色だけ天然色のネガをつくって合成できればいいんだけど、ロジェ・ヴァディムの吸血鬼の映画みたいに、あれは血だったけど」と蜜子はみんなの手にグラスをひとつずつわたし、それにジンかウィスキーかをいちいち訊ねて注いでやりながら、熱心にこたえた。

「おれがそのシステム、考えてみるよ、ああ、おれにはジンをください」とカメラマンは情人にたいしてのような感情をこめてJの妻にいった、幾分は声も低めて。

かれらの映画のテーマは《地獄》だ。Jと蜜子から、地獄をテーマにした短篇映画を作りたいと考えているという話を聞いたとき、若い詩人は異和感をいだいた。かれが蜜子の結婚式でうけた印象は地獄とはおよそ無関係だった。それに結婚のあとジャガーやアリフレクスというこの世の天国の花をえた蜜子は幸福そうだったし、その夫も、幸福な妻をえて、なお幸福そうだったから、なぜJ夫婦が地獄に固執するのかわからなかった。みんなすでに少女趣味の年齢から遠かったのだし。結局、この映画のコメントを書きおわっても、詩人にはなぜ、この映画に地獄が必要なのか理解することはできないだろうという予感があった。しかし、カメラマンが煖炉の火のフィルムの上での効果を量るために広間の燈をけしたとき一瞬、詩人は、その小さな火のなかにかれ自身の個人的な地獄の響きを、聞きとったような気分におそわれはしたのだった。

Jの妹の二十七歳の彫刻家は、みんなの円型の椅子の列の背後にうずくまって古めかしい電蓄を操作した。煖炉のなかの光のあかりだけの室内で、そこは暗い谷間のようだった。やがて不意に、緊張して不安でしかも甘美な、バッハの変ロ長調のパルティータがひびきはじめた、ごく低く弱よわしい音で。ディヌ・リパッティの最後のコンサートという組レコードの一枚だ。かれらは、かれらの地獄の映画の音楽に、このピアノ独奏のレコー

ドを使うだろう。リパッティはこの録音の演奏会にほとんど最悪の健康状態で出た、そしてこれは最後の演奏会になった。かれは二箇月あとベートーヴェンのヘ短調四重奏曲を聞きながら死んでしまった。

「煖炉の上の絵は、蜜子さんがぼくとケイコに見せた絵と似ていますね」と若い俳優がいった。かれは七人のなかで音楽にたいして最も鈍感だ。他の六人もリパッティに意識を集中しつくしているのではなかったが。

「おなじ画家なのよ、ベルギー生れの」

「じゃ、わたしが、こんな風に、胸だけ、リボンみたいな上衣でかくして、裸で歩いてくるわけね」とサワ・ケイコがいった。

「そうなのよ。この庭に、ローマ風の裸の石像がふたつあるのよ、それらのあいだを、ケイコに歩いてきてもらいたいのね。ぼうやは前景に、裸で向うむきに立っているの。パン・フォーカスでとるんだから、もちろん、ぼうやもちゃんとしていてもらわなきゃねえ」

「わたしの毛はこんなに立派じゃないわよ」と率直に十八歳のジャズ・シンガーがいった。

絵はシュール・レアリストのデルヴォの複製だ。キリコ風の永遠に静かな風景のなかを美しい陰毛の、茫然とした典雅な娘たちが歩いてくる。その娘たちの裸体がケイコを恥じさせている理由は他の六人にも素直に感じとることができる。絵の中の彼女たちの陰毛はたとえようもなく美しい栗色をして青銅色に蔭っていた。七人は（こんどはJの妹もふくめて）ジャガーのなかでの酔いをふたたび見出した。夜のはじめから真夜中への車の旅の感覚が腰から足にのこっていて、それが酔いを加速する。十八歳のジャズ・シンガーは、すぐに煖炉の熱気をあつがって服を脱いでしまう。サテンの濃いワインカラーの服は彼女の足もとで死んだ鶏のようだ。彼女はやがて下着までとってしまうだろう。十八歳の娘がひとつの性格をもつとしたら、彼女を人間らしくしている個性的な性格は、露出症だ。誰もサワ・ケイコがナルシストだとは思わない。徹底して彼女の肉体は貧しく未発育なのだ。なぜ彼女が露出症になったか、ということについて若い詩人は、いつかJが、裸のきみは服を着ているきみよりいい、というようなことをいったのではないかと思っていた。Jは彼女にたいして影響力をもっていた。みんなが黙って煖炉の上の絵を眺めみているので、彼女は苛だって、もし必要なら二十日鼠みたいなカツラを下腹に縛りつけるんだが、というようなことをいった。そして彼女はますます残りの六人から無視された気分になり、強いジンを水のように飲みはじめた。

「いまの季節では太陽はどのあたりからのぼるかしら、J」とカメラマンがいった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongb